

会員近況



大阪大学教養部 統計学科 萬代 三郎

現在、次のような研究と関連をもっている。

(1) ソフトウェア保守の実態調査とその体系化

アプリケーション・ソフトウェアのライフサイクルを通して投入される保守コストは、開発の10倍以上ともいわれているが実状は不明確である。これを把握し、効率的な保守の体系化を試みる。また統計解析で特性を把握し、米国のそれと比較する。(調査にご協力いただければ幸いです)

(2) 学術文献情報データベースの開発と検索

現在利用可能なデータベースは専門家の立場から見ると使いにくいものがある。そこでOR/MSと情報システムに絞ってデータベースを作り、検索言語をCODASYL型の汎用DBMSを使って実現する。

(3) データベース・セキュリティの研究

コンピュータ・セキュリティ一般の検討をデータベースに絞り、侵害対策を検討する。これはプライバシー保護、所有権情報の保護と密接に関連をもつ重要なテーマでもある。

コンピューター・リース 中村 英明

大型コンピュータやPCMで急成長したアメリカのアイテル社が破綻し、日本からも撤退することになったのは、一昨年暮のことであった。以来、電子計算機や周辺機器のリースと保守をする会社に関係しているものの素人の悲しさ、保守はおろか、情報の収集やマーケティングについても、手も足も出ず、もっぱら従業員に頼らざるをえない状況が続いている。

したがって、技術やセールスの専門家たちを効果的に動かすことが最大の問題で、特に昇給や賞与には頭を痛めている。こんなわけで、読書となるとつい人間の生きざまに関わるものに目が向いてしまう。

まったく未経験の、しかも技術革新が激しくリスクの大きい世界に足を踏み入れて、びくびくしながらの毎日

である。しかし、1日も早く体制を整え、ORを活用できるようにしたいとも考えている。

(株)山長商店 内材部 平井 孝明

私は、現在木材会社に勤務しておりますが、以前、ソフトウェア会社に勤務していた関係から、オフィスコンピュータによる業務のEDP化に関する調査を行なっています。会社の組織は、内材部、外材部、山林部、総務部となっておりますが、素材の仕入、販売、製品の仕入、販売、製材工場における生産管理、これらが、EDP化を行なう主な業務となります。そして、素材、製品の検取データが、販売、生産管理における基礎データとなり最終的には各種管理資料作成が主な処理になります。今後もEDP化に関する研究のみならず、これらの業務に対し、OR的思考という点においても研究していきたいと思っております。

中京大学教養部数学教室 中田 友一

OR学会員として10年以上たち、ORのことをいろいろと学んできたが、大学で確率統計を教えるだけで、実際問題にたずさわったことはほとんどない。

5年前名古屋へ移転してから、支部活動に参加し、ときどき工場見学に出かける。ふだんなかなか見学できないので、この企画を非常に楽しんでいる。最近では中部電力情報センター、トヨタ自工生産ライン、ノリタケチャイナ、名古屋港湾センター、消防指令センター等々を訪れた。しかし、見学後の質問時に説明員が意外とORのことについて知らないことに気がつくことがある。

それにしても、こうした企業の中で、コンピュータやロボット等の使われ方がすごいのに、改めて驚かされている。最近マスコミにのっているOAがゆき渡ると、今までめんどろだった計算も手軽にできるようになるので、いま一度OR普及期を迎えられるのではないかと期待している。

鹿島建設 機械部計画課 吉竹 弘行

入社3年で会社のことがわかってくると言われますが、その時期になってきて感じることで最近の計画について書いてみたいと思っております。

建設業は立地計画から保全まで担当しますが、実行上必要とされる能力は、マネジメント能力、技術力、折衝力、コスト・プロフィット推定力等多岐にわたります。しかし、これらの能力は観点をかえれば、技術力はリスクの発生確率およびロスを推定できる力、折衝力はリスクの一部を相手にヘッジする力といったように、リスク推定力に大きく依存していると言えます。現在大手建設業者はE C化（エンジニアリング・コンストラクター）を旨ざしていますが、いろいろな面で経験のないプロジェクトに関与する場合、このリスク推定力が大きな力になると考え、私なりに、リスクに関する研究を開始しております。もしリスクについて参考になるご意見があればぜひお教えくださるよう、この場をお借りしてお願いいたします。

三菱自工生産管理技術部開発課 上田 恭嗣

53年4月に三菱重工より今の職場に移りました。数学モデル分析による意思決定が多く職場にいきわたるにつれて時々遭遇する「モデルに対する不安」について私見をのべます。事例発表等が豊富になったこともあり、ニーズが与えられてから一応モデルができあがるまでの日数が昔より短縮されたのはけっこうだけれども、実地への適用がさっぱり進まず、その内やめてしまったというケースがあちこちに見られないでしょうか。よそさま

のことは知りませんが、私の経験から推定しました。やめたのにはさまざまな理由があるわけですがその一つに「モデルの結論に対するいわれなき不安」があります。これはリーダーが若い人やベテランの場合にはおこらずどちらかというリーダーになって日が浅く、自己のモデル観(この問題にはこの程度のモデルで通用するはず)がまだ不十分で、一方、失敗して会社に損失を与えることのこわさが先に立つタイプのリーダーに見受けられます。一見慎重なリーダーに見えますが問題の分析把握が不徹底であってそのために直観的にモデルの説明力に不安を感じている場合にこれが生じやすいようです。これは慎重なのではなくて単に仕事の不十分であるにすぎないわけですから、もうひとふんばりして不安も科学的に分析し除去するのがリーダーのつとめです。その上司にORのベテランがおれば見ぬけますが、そうでない、リーダーの申し立てをそのまま信ぜざるを得ない職場ではこれがおこりやすいでしょう。モデルの説明力に対する不安とモデルの結果に対する不安がごっちゃになっているわけですが、前者についてはがんばって分析把握を続けるしかありません。そのうえでモデルの算出結果に「リスク」として残るものはこれらはなんと致し方ありません。ちなみに「リスク」はモデルの入力であり、モデルの内部構造ではないことはそのチェックポイントになるでしょう。書き終わってから昔このような記事をどこかで読んだことがあるような気がしてまいりました。

編集後記 ▶いよいよ師走、やっと師走、はやくも師走、…。人によりいろいろと感想は異なることでしょうが、ともかく師走。本誌も第26巻は本号が最終号となり一応ケジメをつけたいと思いますが、果してできていますでしょうか。▶その言訳けではありませんが、本号の特集は「ファジィ・システム論」。人間のもつあいまいさを肯定したうえで新しい論理体系を築くというきわめて魅力的な方法です。すでに現実に適用され成果をあげている分野もあり、今後とも大いに期待できるものの一つ

といえます。それらの最新の動向を、特に応用面との関連でまとめてもらいました。少しでも刺激となって新しい研究が進展することを期待します。▶前編集委員から引き継いで早や半年。モニター委員をはじめとして会員各位からの貴重なご意見、有難うございました。私どもの力不足により、十分実現できなかったことも多いかと思いますが、実現に向けてより一層の努力をする覚悟です。来年もよろしくご指導お願い致します。では、よいお年を。(M)

オペレーションズ・リサーチ

昭和56年12月号 第26巻（新シリーズ第6巻）12号 通巻252号

代表者 松田武彦

発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) ☎ 113

編集人 小林竜一

発売所 株式会社 日科技連出版社

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 ☎ 151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 850円（郵送料含）年間予約購読料 9600円（郵送料含）

本誌への広告お申し込みは明報社（571-2548）、日経弘報社（563-2241）へ